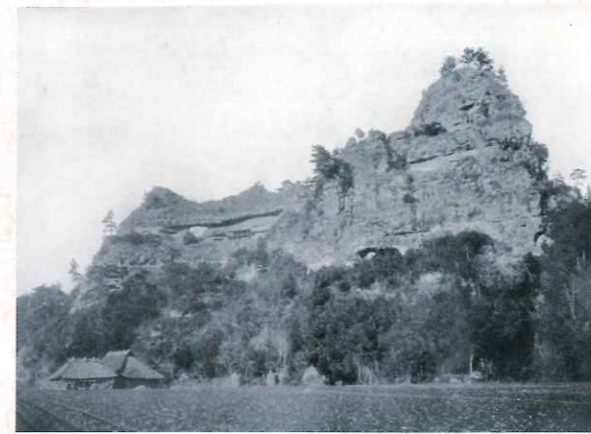


国指定重要文化財

羅漢寺石仏の世界

羅漢護禪 漢國寺

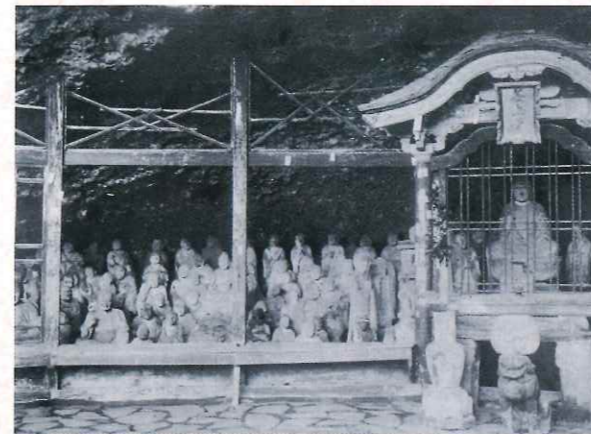
Nationally designated cultural property



古羅漢旧景



羅漢寺旧景



無漏窟五百羅漢



宝物館内部(焼失)

近世以降の羅漢寺

中世の羅漢寺は臨済宗派の寺院でしたが、戦国の戦乱により衰退しました。その後、慶長五年（一六〇〇）、鉄村禪師が曹洞宗として復興します。二世伝宿玄宅は、実際にその復興にあたった人物で、参道の整備を行ないます。中津城主となった細川忠興は羅漢寺に深く帰依して寺領を寄付し、堂舎が建て直されました。江戸時代には、禅海和尚が青の洞門を開鑿し、参道・街道の整備が行なわれ、諸国から多くの人々が参詣する寺院として発展します。

しかし、昭和十八年、不運にも火災によって本堂ほか大部分の建物を焼失しました。現在の建物は再興されたものですが、古写真によってかつての面影をみることができます。火災以前に持ち出されて焼失をまぬがれた宝物の一部も存在します。明治期の大実業家廣瀬宰平が羅漢寺から得た十八羅漢図（六幅・明時代）もその一つで、現在も廣瀬家に伝来しています。

— 国指定重要文化財 羅漢寺石仏の世界 —

発行 二〇二五年一月
中津市教育委員会
協力 羅漢寺・別府大学・廣誠院



十八羅漢図・明時代 廣誠院所蔵

羅漢寺散策マップ

5 千年杉

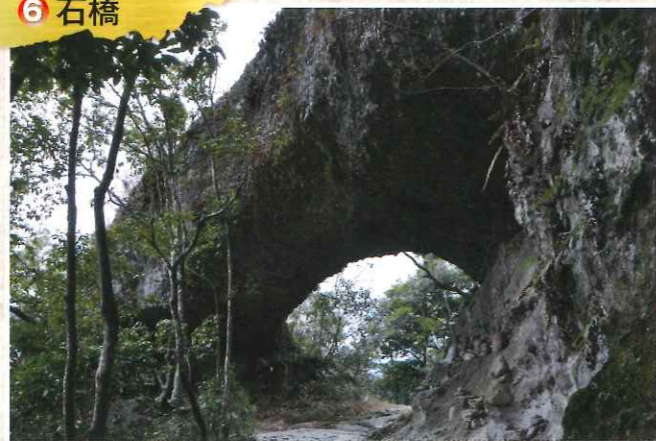


(千年杉)



(参道)

6 石橋



(石橋)

7 弥勒菩薩



(弥勒菩薩)

8 千体地蔵



(千体地蔵)



(千体地蔵)

9 山門



(山門)

10 五百羅漢



(五百羅漢)

11 本堂・滝跡



(本堂)

12 開山臺



(開山無縫塔)



(開山宝塔)



ゆっくり歩いて古羅漢・羅漢寺、それぞれ1時間位です。羅漢寺はリフトを使えば40分程度で参拝できます。



1 古羅漢



(古羅漢全景)

2 智剛寺



(古羅漢国東塔)



(智剛寺無縫塔)

3 且過寺跡



(且過寺跡虚空蔵菩薩像)

4 仁王門



(仁王門)

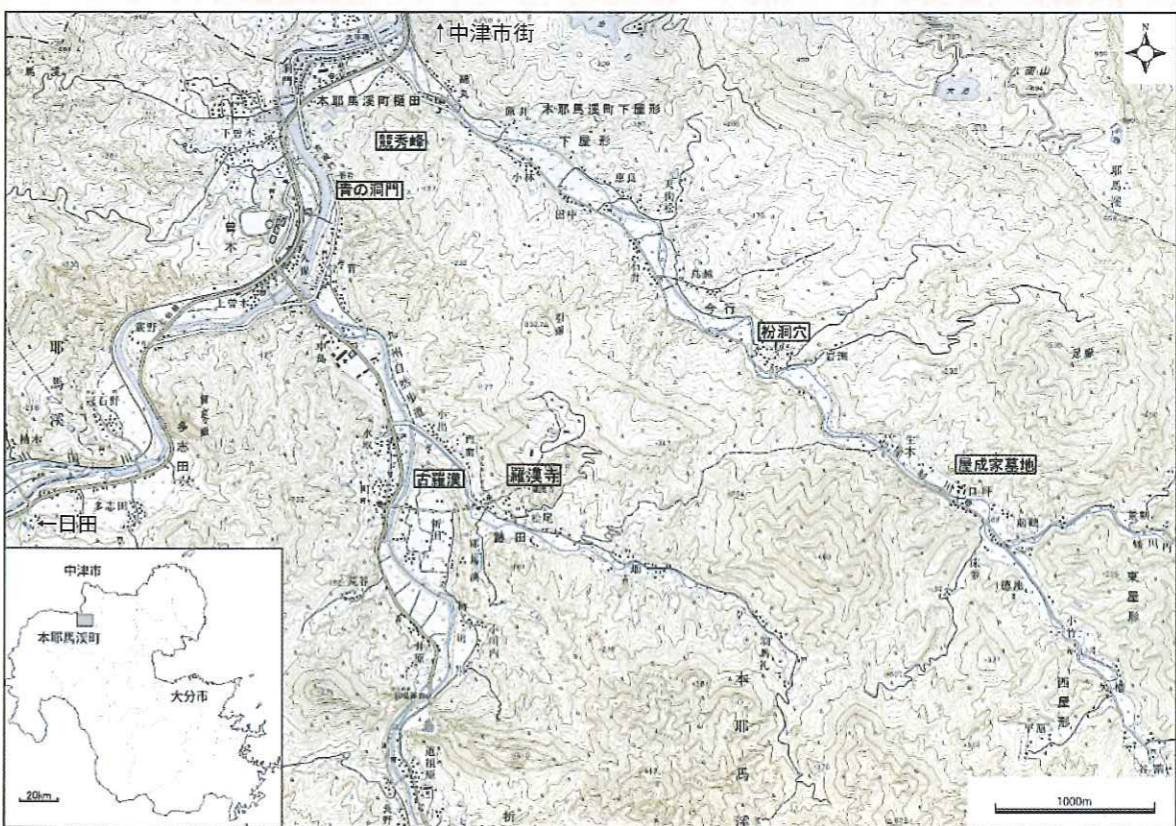
羅漢寺の位置と環境

羅漢寺がある中津市本耶馬溪町は、中津市の中東部に位置し、市街地から南方約十二kmにあります。

中津市域には英彦山にその源を発する一級河川山国川が南北に流れ、流域一帯を潤しています。本耶馬溪町内は周囲を八面山、大平山、木の子岳など、標高600m台の山に囲まれており、屋形川、跡田川などの山国川支流が流れる谷景観となっています。

また、耶馬溪地域には、火山の噴火や河川の浸食によってできた、奇岩・秀峰が織り成す景観が広がります。江戸時代の儒学者頼山陽は、この景観を「耶馬溪」と命名しました。耶馬溪の景観は大正十二年(一九二二)に国の名勝、昭和二十五年(一九五〇)に耶馬日田英彦山国定公園に指定されています。

羅漢寺はこの耶馬溪の中にあり、台地状の溶岩によってできた羅漢山と、岩が隆起した古羅漢からなります。



羅漢寺周辺地図

羅漢寺の歴史

一 法道仙人の伝説と古代仏教文化

耆闍窟山羅漢寺は、現在曹洞宗総持寺派の禅宗寺院です。明治の寺院明細帳などに記録された寺伝によりますと、大化元年(六四五)に天竺から渡来した法道仙人が、閻浮堤金の観音像を窟におさめたのが始まりとされています。現在お寺に伝わる銅造観音菩薩立像は、この時もたらされた像であると伝えられており、大化年間には遡らないものの、奈良時代の金銅仏として評価されています。この開基伝説には史料裏付けはありませんが、周辺には八面山を中心に、古代仏教文化が展開していたと考えられ、山中の岩屋には平安仏が安置されている場所も多く存在します。



銅造観音菩薩像



木造妙見菩薩坐像

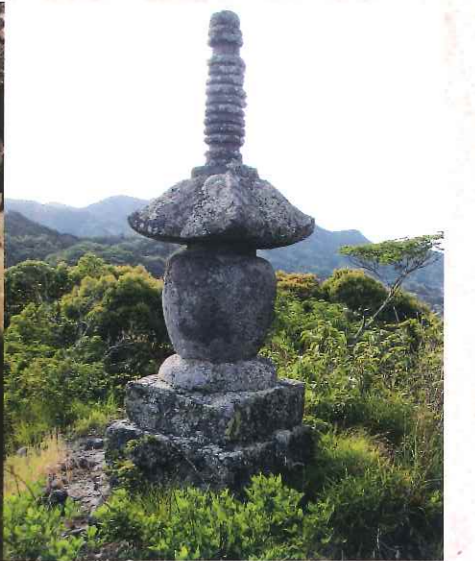
有形文化財)などは、羅漢寺とともにこの地域の古代仏教文化を今に伝えていきます。

二 禅刹羅漢寺の創建・円籠昭覚と逆流建順

暦応元年(一三三八)、円籠昭覚という禅僧が禅刹羅漢寺を開きました。近世の編纂物である『豊鐘善鳴録』によれば、円籠昭覚は豊後国田染郷出身で、大神惟将の子とされています。また、中世田染荘を支配していた田染氏の系図によれば、昭覚は童名宮乙といひ、宇佐宮権擬神主の田染忠基の子となっています。田染氏は田染荘の庄官として宇佐神宮から派遣された家であり、宇佐宮権大宮司家永弘氏の庶流とされています。円籠は十四歳のとき出家し、鎌倉寿福寺の寂庵上昭(黄龍派)という高僧に入門しました。寿福寺は鎌倉五山第三位の寺院で、北条政子の発願で臨済宗祖師栄西によって開山されました。

栄西から数えて四代にあたる寂庵に弟子入りした円籠は、臨済宗の正統である黄龍派に属する僧であり、栄西以来の禅密并修の教義を受け継いでいたと考えられます。羅漢寺を開く円籠昭覚は、国東六郷満山や宇佐宮との関わりの中で育ち、寿福寺という禅密并修を説く天台密教色の強い思想を持っていたのです。

修行ののち故郷に戻る途中、豊前国の大岩屋に十六羅漢図を安置しました。円籠はそこを「耆闍窟羅漢精舎」と名づけ、岩下に庵を構えて「幻住庵」とよびました。これが現在の羅漢寺の地です。その後、山の麓に末寺「睡龍山智剛寺」を建立して隠棲したといわれています。智剛寺から対岸の古羅漢を望むと岩峰上にそびえ立つ国東塔のシルエットが浮かびます。国東塔を見つめながら円籠は遠く故郷を想っていたのでしょうか。



古羅漢国東塔

つづいて、正平十四年（一二五九）、逆流建順という僧が円龜のもとを訪れました。逆流建順は、出雲国雲樹寺の三光国師（孤峰覚明・法燈派）に従っていた人物で、三光国師が開いた雲樹寺（島根県安来市）の歴代住持の中に、十世住持としてその名を連ねています。



五百羅漢

円龜とともに耆闍窟をみた逆流は、この窟に五百羅漢の聖像を造立することを発願し、「幻住庵」を「安心庵」と改めました。ふたりの石彫技術は鮮麗で、五百羅漢の外に、釈迦如来、普賢・文殊の両菩薩、十大弟子、十六羅漢、四天王などの七百余体を僅か一年の歳月で完成させました。正平十五年（一二六〇）十月十四日には、

博多聖福寺の住持月堂宗規を導師として慶賛供養が執り行われました。円龜昭覚と逆流建順はどのような関係にあったのでしょうか。江戸時代、妙心寺の無著道忠が記した「三光国師碑銘」には、逆流建順とともに、羅漢玄峰昭覚という人物が雲樹寺八世住持として名を連ねています。羅漢玄峰昭覚とは、すなわち円龜昭覚のことです。円龜は黄龍派の寂庵に師事したのちに、法燈派の三光国師に参禅したということになります。つまり円龜と逆流は雲樹寺とともに三光国師の元で修行した兄弟弟子の関係にあったのです。

石仏の造立後、逆流は博多から商船にのって中国天台山の国清寺に渡りました。それから間もなくして亡くなったといえます。応安四年（一三七二）、逆流の跡を継いで安心庵主となった祖訣は、京都東福寺の住持高庵芝丘に依頼して、羅漢の造立や開山の経緯を記録した「豊州羅漢窟記」を作成しました。



雲樹寺

三 舍利塔を納め、堂舎成る

京都相国寺の住持絶海中津の詩文集『蕉堅藁』に「豊州羅漢寺舍利塔銘」という一文が収録されています。この舍利塔に該当する金銅製火焰宝珠形舍利容器が羅漢寺の寺宝として伝わっています。

この記録によれば、永和二年（一二七六）、長門国より五男二婦人が来訪し、仏舍利一粒をおさめました。その夜、円龜は夢で、仏舍利は阿育王塔中の旧物であると伝えられます。円龜は長門に行き、その人々を探しますが、見つけることができず、舍利を収める宝塔も作り果たせずに、至徳元年（一一三八四）に示寂しました。その徒省卓は足利義満に謁見し、義満より羅漢寺の名と額を賜り、管領細川頼之とその夫人から舍利塔が奉納されたといえます。そして省卓は、その塔銘を当時最も高名な禅僧であった相国寺の住持の絶海中津に求めたのです。その後、羅漢寺二世住持にもなった省卓についてはもう



舍利塔

一つ注目すべき史料があります。「太宰管内志」に収録された「宇佐宮御許山鐘銘」には、「阿羅漢寺主僧省卓」が、応永二年（一三九五）に、いわゆる勸進僧として、戦乱によって荒廃した宇佐神宮の御許山を憂い、大内氏・大友氏の協力を仰ぎ、特に大内満弘の寄進を受けて梵鐘を造ったことが記されています。

室町幕府・守護大内氏・宇佐神宮などから厚い保護を受けた羅漢寺は、豊前における禅宗の拠点寺院として発展し、中世を通じて人々から崇敬を集めました。



羅漢寺本堂



迦葉像

石造文殊菩薩騎像

石造普賢菩薩騎像



石造釈迦如来坐像



五百羅漢



宝誌和尚像

無漏窟

国指定重要文化財 『羅漢寺石仏』

羅漢寺には多くの石仏があり、無漏窟とよばれる岩窟に安置された五百羅漢はその中心的な石仏群です。

窟の中央に大きな平石が露出し、その下に中尊である釈迦如来坐像が置かれています。平石は釈迦如来を莊嚴する天蓋を意味しています。左右には白象に乗った普賢菩薩像と、獅子に乗った文殊菩薩像が脇侍として置かれています。

釈迦如来を囲むように立ち並ぶのは十大弟子です。無漏窟の釈迦如来は蓮華の花を持っています。昔、釈迦が大衆の前で説法した時、無言で蓮華の花を持ちました。皆はその意味がわからなかったのですが、十大弟子の一人、迦葉だけがその意味を悟って微笑しました。この「拈華微笑」の説話を表現したのが、無漏窟の釈迦如来と迦葉（十大弟子像の内向かって右手前）です。

窟の左右には七段のひな壇を設けて五百羅漢が置かれています。その最前列に彼らを守るように、梵天・帝釈天・四天王・日天・月天・龍王が並んでいます。供養具として卓・経机・華瓶・邪鬼が担いだ灯籠・供物皿・獅子形香炉もすべて石で造られているのも、この石仏群の大きな特徴です。

五百羅漢は無漏窟だけでなく、その周囲にも安置され、天台山の象徴である石梁瀑布をイメージする石橋・滝があり、羅漢寺境内全域が羅漢の聖地である天台山にみだてられていることがわかります。五百羅漢には、「伏虎（虎の歯磨き）」「鐘担ぎ」「樹中座禪」「宝誌和尚」「観瀑（滝と韋駄天）」など、大徳寺本五百羅漢図（南宋時代）と共通する図像が含まれ、十四世紀の彫像例としては日本で最も早く、当時中国から伝わった五百羅漢の信仰が形となった寺院だといえます。

千体地蔵

石造地蔵菩薩坐像



閻魔大玉



変成王



平等王



都市王



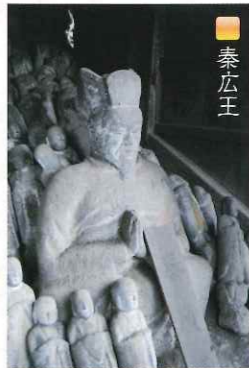
太山王



宋帝王



秦広王



五道転輪王



初江王



五宮王



千体地蔵

千体地蔵は、中央に大型の石造地蔵菩薩像を安置し、その周りをおびただしい数の小型の地蔵が囲んでいます。前列には石造十王像が置かれ、羅漢寺に地蔵信仰や地獄思想があったことがうかがえます。『豊鐘善鳴録』によると、室町時代に來山した普賢円智という禅僧が造立したことを伝えますが、普賢禅師については他に史料がなく、実像はあきらかではありません。

千体あるという小型地蔵はいくつかの画像のパターンがあります。一度に制作されたというよりは、信仰を持つ多くの人々の奉納によって造られていったのではないかと考えられます。

参道のお地蔵さん

巨過跡から仁王門にかけての参道沿いに地蔵菩薩像が点在しています。そのいくつかには銘文があり、南北朝～室町期のものであることがわかりました。また、地蔵の衣には奉納者と思われる名前があることから、中世の羅漢寺に地蔵を奉納し、極楽往生を願う信仰があったことがうかがえます。特に応安七年（一三七四）の紀年銘をもつ地蔵は、五百羅漢に通じる造形で、羅漢寺石仏の年代を考える一つの指標になっています。

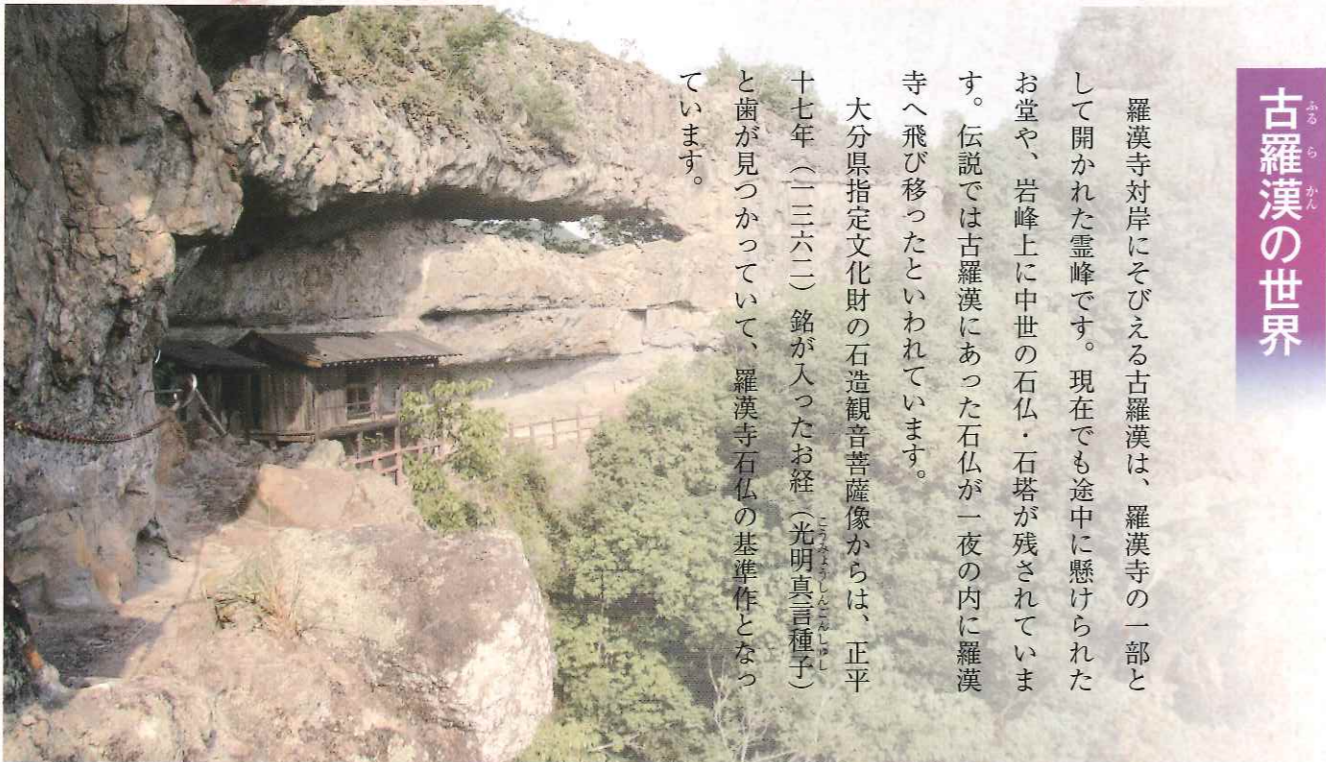
古羅漢の世界

羅漢寺対岸にそびえる古羅漢は、羅漢寺の一部として開かれた霊峰です。現在でも途中に懸けられたお堂や、岩峰上に中世の石仏・石塔が残されています。伝説では古羅漢にあった石仏が一夜の内に羅漢寺へ飛び移ったといわれています。

大分県指定文化財の石造観音菩薩像からは、正平十七年（一三六二）銘が入ったお経（光明真言種子）と歯が見つかっていて、羅漢寺石仏の基準作となっています。



■ 応安七年銘地蔵菩薩像



古羅漢石造観音菩薩坐像・僧形像



古羅漢石仏納入品